

## 肥前国 島原半島への旅のいざない

瀧野 實

1792年（寛政4年）の雲仙岳噴火に続く火山性地震を引き金とした溶岩円頂丘“眉山”の崩壊とそれによる災害は『島原大變肥後迷惑』と称されているように日本火山災害史上あまりにも有名である。以後、およそ200年の間合いを置いて1990年（平成2年）の噴火をみたのであるが、1993年の現在に至る火山活動は皆さん周知のとおりである。

私は日本最西端県庁所在地、長崎市内の某女子短大で20年間、地理学を講じてきた。後半の10ヶ年は毎年のように島原半島を地理学巡検の場を選び親しんできた。とりわけ雲仙火山をメインとした胴体部は地体構造上、日本国内では珍しい正断層地域である。とくに北部の活断層である千々石断層は南向きに垂直に近い見事な断層崖をもつことで知られている。

島原半島への西からのコースの一つは、巾約5kmの愛野地峡を通過して南東へ進むと、まもなく島原半島でもあまり浸食の進んでいない愛野扇状地の扇端部に出る。雲仙火山の山麓には多くの火山山麓扇状地が重なり合うかたちで展開する。これら扇状地では四月から五月初めにかけてメークインを主とする馬鈴薯の小さな白や薄紫の可憐な花ですっかり埋め尽くされる。扇状地を主とする畑作地帯は旧くは小麦と甘藷の栽培地域であったが、昭和40年代後半に野菜としての暖地馬鈴薯栽培地域へと転換し現在に至っている。

愛野扇状地を東に昇りつめると眼下にたもばな橋湾（別名、千々石湾とも言う）が広がる。足もとは標高100m南向きの断崖絶壁がそそり立つ。国道はこの断崖を斜めに這うようがけしたに降りていく。途中で展望所があり、ここからは雲仙火山の地震源でもあり、一説にはカルデラと考えられている千々石湾のはるか東方にコニーデ型の雲仙火山、東南方にはペディオニーテ型の南島原火山を望むことができ、まことに絶景である。山形出身の歌人で旧長崎医専の教授であった斉藤茂吉

は、大正9年ここから雲仙の山並みをみて『千々石灘に向いて低く幾つ谷、息づくごとし山のうねりは』の歌を残している。

千々石断層崖上にある展望所付近から対岸の温泉地小浜を遠望できる。風の無い天気の良い日には温泉地独特のゆらぎながら立ち昇る幾条もの白い蒸気が眺められ情緒ゆたかである。ここ小浜の温泉街は海岸の崖下や海岸の埋立地に並行して立地する。ホテルや旅館はもとより多くの家に温泉を引いているが湧出する温泉の大半はそのまゝ海に流出する。かつては専売法と政府補助金に支えられて温泉熱利用による製塩が盛んであったが今は無い。温泉街の西側は橋湾が拡がり四季を通じて、太陽の落日に伴う空と海の織りなす天然の美は壮大絶妙である。この情景を茂吉は『ここに来て落日を見るを常とせり、海の落日も忘れざるべし』と読んでいる。

小浜から雲仙までは登山バスで約30分、とくに雲仙は長崎、上海等に居留する欧米人の保養地、避暑地として明治、大正に入って本格的に聞かれ、東の軽井沢に対して西の雲仙であった。茂吉の随筆の中に『小浜に行った。そこで鯛などを食べて、西洋人に混って砂浜（現在は埋め立てられ往時を忍ぶことは出来ない。）で午後の日光を浴びながら少し英語を使ってみたりした。小浜は豊かな温泉場である。』とある。

雲仙の地獄地帯は雲仙のシンボルでもある。地形的には俗称おびやま帯山（爆裂火口壁か？）と網笠山の間を介在し、一見爆裂火口底かとも思えるほどである。古風土記である肥前国風土記（713年）には『流勢甚多 熱異餘湯 但和冷水 乃得沐浴 其味酸 有流黄白土』とある。また古き時代における雲仙普賢岳の火山活動について、倭名類聚抄（930年代）の巻63肥前高来郡の項に『温泉山在高来郡、巋然摩天、懸崖臨海、山頂噴火、烟燄蔽空、或熱湯奔騰、』とある。

—1993年：長崎純心短大定年退職と還暦の歳—